

「指導力不足教師」を生み出したいくないと願う大学教育の 指導の在り方

— 本学における初等体育科教育（陸上運動）の授業の実践を例として —

What University Education should be for not Producing
“A Teacher Who lacks Instruction Ability in School Education” ?

— In a Case of Pedagogy of School Physical Education (Movement of Track & Field)
for Elementary School in The University of Yamanashi —

植屋清見* 孫大鵬†

UEYA Kiyomi SON Taiho

要約: 教育現場において、「指導力不足教師」なる存在が社会的な問題となっている。その概念は「授業をきちんとできなかつたり、子どもとうまく接することができなかつたり、教育者としてのモラルを欠いた教師であつたり、学級経営ができない教師であつたり、指導すべき教材（内容）への知識の欠如であつたりということ」等である。その数は残念ながら年々増加傾向にあり、平成16年度の報告（2005年8月9日）によると全国で「566人」と報告されている。しかし、教師としてのモラルや行動に問題はないとしても指導すべき教材に関しての指導力の不足と言うことになるとその数はものの比ではないと考えられる。筆者が大学で教職科目として指導している「初等体育科教育」つまり、大学卒業後小学校の教師になったとした時、体育の授業を指導するという状況はその最たる例であると考えられる。児童よりも走り幅跳びの記録が劣る、鉄棒の逆上がりができない、泳げないといった実技能力に劣る教師は全国レベルで見れば相当数いる筈である。しかし、体育の授業に関して「指導力不足教師」として認定された教師は現在のところはゼロに近い。

ところで、「指導力不足」と認定されると一定の研修が義務づけられるが、依願退職や各種の処分（降格、休職、免職等）も課せられており、このことへの世論も賛否いろいろである。このような「指導力不足教師」を防ぐひとつの重要な手段が大学における「指導力不足教師」を生み出さないと願う教育及び指導の仕方であろうと考えられる。大学教育において、将来、教育者になるためのモラルや態度を身に付けさせ、指導力に関する知識や体験を積ませることによってかなり防げると考えるのは当然である。教員養成大学（学部・学科）が大学として機能し、評価される所以はまさに此处らあたりにあるわけである。

キーワード: 指導力不足教師, 大学教育, 初等体育科教育, 陸上運動, 指導力, 実技能力

I 緒言

文部省学習指導要領における小学校体育の目標は「心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と、健康・安全についての理解を通して、運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる」とされている。しかしながら、今日我が国の児童・生徒を取り巻く状況の中で必ずしも小学校体育の目標に沿わない小学生の存在が多々見受けられる。「転んでも手の出ない小学生増加」「走・跳・投能力年々低下傾向～小学生の体力・運動能力」「小3・放火」「小学校6年生車を盗む」「小5年生・いじめに耐えられず自殺」「終夜営業の塾・学校より楽しい」等のマスコミ報道等は果たして「楽しく明るい生活を営む態度」の延長線上にある小学生の実態であろうか。小学校体育が額面通り、学習指導要領に沿って行われたならばこのような痛ましい、悲惨な状況は起こりえない筈である。しかしながら、このような状況が現実であるということは「体育の目標」が目標として実現されていない事実以外の何物でもない。これらの原因としては幾つかの問題が考えられるが、大きな問題として小学校体育の指導に当たっている教師の体育における指導力不足が憂慮される。小学校教師に指導すべき体育の領域、内容（種目）への確かな指導力があれば、児童は体育の授業に積極的に楽しく参加でき、結果として「思い切り動き回れる時間」「仲間と協力し合ってゲームができる時間」「楽しい時間」等としての態度が身に付き、体育大好き児童の誕生となるのではなかろうか。初等体育科教育はこのような児童の育成を目指して、将来小学校の教師になった暁には自らが体育を好きとし、健康の保持増進や体力の向上を図り、各種の実技能力の向上を目指すことの努力の重要性を気付かせる授業である。

II 研究目的

本研究の目的は今日社会的な問題になっている学校の「指導力不足教師」に関して、決して指導力不足の教師を大学教育の授業から生み出したいくないと願う筆者の「初等体育科教育」の授業の行われ方を紹介し、更に充実した初等体育科教育の授業への批判や示唆を仰ぐこと等である。

III 文部科学省学習指導要領にみる小学校体育

1 小学校体育の目標と体育の指導に当たる教師のあるべき姿

文部科学省の学習指導要領における小学校体育の目標は【①心と体を一体としてとらえ、②適切な運動の経験と、③健康・安全についての理解を通して、④運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、⑤健康の保持増進と、⑥体力の向上を図り、⑦楽しく明るい生活を営む態度を育てる】とされている。従って、指導の任に当たる教師には、自らがこの目標に沿った生き方が問われているはずである。例えば、「運動に親しむ資質や能力を育てる」とは体育を指導する教師が児童をして運動に親しませ、その能力を高めさせるという意味であり、そのためには自らが運動に親しみ、その能力を高める努力を怠ってはならないのである。同様に健康の保持増進、体力の向上に努めなければならないのである。

2 小学校体育で指導すべき領域・内容

表1は現在小学校体育で指導しなければならない内容を学年ごとにまとめたもので、小学校の教師になれば、今日の小学校の教育が「クラス担任制」で行われている現状では基本的にクラス担任が体育が好きであろうが嫌いであろうが、得意であろうが不得意であろうが、体育の授業の指導をしなければならないことになっている。例え、泳力のない教師でも水泳の指導をしなければならない。果たして、このような教師の体育の指導から水泳好きの児童が生まれるのであろうか。生まれるとしたらそれは奇跡に近い。

IV 小学校体育に対応する「本学保健体育講座」における授業の枠組みの工夫

1 指導すべき領域をすべて網羅するという考え

	1・2年生	3・4年生	5・6年生
基本の運動	○	○	
体づくり運動			○
ゲーム	○	○	
器械運動		○	○
水泳		○	○
表現運動		○	○
陸上運動			○
ボール運動			○
保健		○	○

表 1: 指導すべき領域とその対象学年

本学保健体育講座では小学校体育の指導に関して、指導すべき領域の全てに対応すべきであるとの考えから、学校教育課程の学生には必修教科としての一年時の「保健体育A・B」と小学校教諭普通免許の科目としての「体育理論及び演習」、「初等体育科教育」の授業で、受講生、つまり、教師（必ずしも小学校とは限らない）を志望する学生の体育の指導力の向上を目指す方向の枠組みで授業を行っている。「保健体育A・B」では基本的に身体を動かすことの喜びや意味を体験しつつ、「基本の運動」「ゲーム」「ボール運動」「水泳」を、「体育理論及び演習」では「体づくり」「器械運動」「表現運動」を、そして「初等体育科教育」では「ボール運動」「陸上運動」と「水泳」を柱立てに授業を展開している。「保健」に関してはこれらの個々の授業の中で適宜指導の対象にすることになっている。このような対応の仕方は他の教員養成大学・学部・学科に類を見ない試みである。

2 本学における初等体育科教育の行われ方

本学における「初等体育科教育」は小学校教諭普通免許のI種の資格取得の対象となっているが、その取得に関しては「音楽（初等音楽科教育）」と「体育（初等体育科教育）」の中からどちらかの

科目をひとつ選択するもので、必ずしも全員に対して必修科目ではない。従って、小学校I種の免許取得者でも、必ずしもこの初等体育科教育の履修をしなくてもいいのである。しかしこのような教師予備軍が結果的に小学校の教師になったとすれば、この初等体育科教育の受講なしの状況で、小学校体育の目標も、指導の仕方の専門的な指導も受けずして、体育の授業を担当しなければいけないのである（小学校教諭普通免許II種取得者も同様）。こういう教師の体育の授業を憂慮しなければならないのはごく当たり前のことであろう。

授業は半期完結制のもと、前期・後期、各々15回ずつ行われる授業であるが、この15回の授業の最初のオリエンテーションを除いた、残りの14回を「ボール運動」「陸上運動」の2種目を7回ずつ行い、7回終了時点で、種目を交替して行われる授業である。もっともこの僅か7回の授業の中で必ず「水泳」も指導する授業として行われる。

3 授業の行われ方・進め方

(1) オリエンテーション

第1回目の授業はオリエンテーションとして本授業の概要や進め方（履修の仕方）等を確認する。具体的には配付資料を持って説明されるが「陸上運動」に関するその内容は、

1. 本授業は将来、小学校の教師となり、「体育の授業の担い手」として授業するにふさわしい「経験」「知識」「技能」「態度」「習慣」等を身につけるべき方向で行われる。
2. そのためには、あなた自身が「小学校体育」に関わるあらゆる状況を理解し、実践することがまず問われる。
3. あなたは「体育の授業」が待ち遠しくて待ち遠しくてたまならないという児童の気持ちが分かりますか。また逆に、「体育の授業」が嫌で嫌で仕方がないと言う児童の気持ちが分かりますか？
4. ところで、何故、小学校の教育に「体育の授業」があるのだろうか？
5. 小学校における「体育の授業」は児童に何をもたらせてくれるのであろうか？
6. あなたは児童の前で小学校体育に関わる色々な運動（教材）の「師範」を見せられる実技能力を身につけていますか？
7. 小学校の高学年を担当するとすれば陸上運動の領域で「短距離走」「走り幅跳び」「走り高跳び」「ハードル走」「リレー」の指導もしなければならない。そのことを知っていましたか？
8. 現時点で、あなたは小学校の「陸上運動」を指導できる指導力を有していますか？
9. もしも、現時点のあなたに「体育の授業を指導される児童」を想定したときに、体育に関して、或いは学校生活全般に対してどのような児童が生まれると思いますか？
10. 「小学校体育の目標」をあなたは知っていますか。また、小学校体育で指導すべき領域とその学年設定を知っていますか？
11. ところで、あなたの走り幅跳びの記録は何mですか。ちなみに、小学校、5・6年次の男児・女児の記録は「 ? 」mです。両者を比較してみよう。
12. 「2.30m」しか跳べない先生（あなたとしよう）は、3.40mと自分よりも能力の高い児童にどのような走り幅跳びの指導をするのであろうか？

13. 授業全般に関する確認事項①全出席が前提で、出席は単位取得の必要条件のひとつにこそなれ、十分条件にはなり得ない。②本授業は基本的には小学校体育に関わる「陸上運動」を中心に行われる（但し水泳の指導も行われる）。③児童の前で「師範」を見せられるレベルの実技能力、指導力の向上を目指す。④授業は毎回、必ずある課題を設定してその課題解決という方向で行われる。⑤文部科学省で言う「小学校体育の目標」に沿った自らの生活の確立を期す。⑥学習指導案が書けるようになることを目指す。
14. 単位取得の条件①出席、②授業態度、③ノート学習、④小学校体育の目標の理解、⑤実技能力：短距離走、走り幅跳び、走り高跳び、ハードル走の記録（標準記録突破）、⑥水泳の泳力等総合的な観点から教育的に行われる。もっとも、本授業で強調したいことは「小学校の教師を目指すあなたに学校体育の意味と意義を理解し」→「体育を好きになってもらいたい」→「小学校体育の目標に沿った生活の実践・態度を身につけた教師予備軍であってほしい」→「教員採用試験に合格し」→「体育の授業に関して「指導力不足教師」にだけはなってほしくない」という願いである。

尚、ノート学習のための参考図書、プリント等は授業中に適宜指示する。

V 初等体育科教育における「陸上運動」

1 小学校体育における陸上運動の内容と目標

小学校体育における陸上運動の実施は第5学年及び6学年で行われる。その内容は「1) 自己の能力に適した課題を持って次の運動<ア) 短距離走・リレー及びハードル走、イ) 走り幅跳び及び走り高跳び>を行い、その技能を身につけ、競争したり、記録を高めたりすることができるようにする。2) 互いに協力して安全に練習や競争ができるようにするとともに、競争では勝敗に対して正しい態度がとれるようにする。3) 自己の能力に適した課題を決め、課題の解決の仕方を工夫することができるようにする。」となっている。

2 陸上運動とは

授業は基本的にグラウンドにて行われるが、受講生の思いは「陸上運動＝陸上競技」でしかない。しかし、陸上運動とは読んで字の如く「陸の上で行われる運動の総称」と解すれば、必ずしも「0.1秒、1cmの価値観」で勝敗を競う「陸上競技」とは同一ではない。指導すべき内容は後述するように陸上競技の種目になっているが、本授業では前述のように拡大解釈して陸上運動とは「ドッジボールや鬼ごっこ」で走る運動も陸の上で行われる運動であることから、陸上運動と考えられるのである。

3 授業の展開

(1) ゴルフを用いた陸上運動

第1回目のグラウンドでの授業はゴルフを教材にした陸上運動である。クラブの握り方、安全性、簡単なスコアの教え方等をひと通り指導した後、2人1組で、グラウンドの例えば、サッカーゴールの支柱を「ホール」と見なし、「パー5とかパー6」と決めて、その打数を競う。当然、打数の少

ない方がそのホールの勝者となる。これを3～4回繰り返す。大切なことはこの授業はゴルフの授業ではなく、あくまでも陸上運動の授業であることの認識である。従って、打った後はジョギングでボールの位置まで走り、次の打席までの間に屈伸運動や腰の捻転等の柔軟運動等を行う。複数の受講生に「カロリーカウンター」を装着し、ラウンド中の運動量（総歩数、消費カロリー、基礎代謝、1日で運動で消費すべきカロリー）を測定する。例えば、これだけの運動量を消費するために、もしもグラウンドを走ったとすれば、300mの「トラック何周に相当すると思うか？」なる課題を与え、何周分の運動に相当するかの回答を授業終了時に与える。恐らく受講生にトラック何周かのジョギングを命じたら、誰一人楽しそうに走る者はいないが、このゴルフを用いた運動体であれば、結果として何周かに相当するジョギングを全員が、楽しく行ったことになる。受講生の心の中にある「陸上競技嫌い」の想いがまず最初の授業で払拭される。

(2) 出欠の確認と準備運動

出欠の確認は写真付きの受講カードによって行われる。授業者の目論見は受講生の顔を全員覚え、学内で会ったときにはお互いに挨拶を交わせるような関係でありたいとの思いからフルネームで名前と呼ぶ。その際、必ず返事として帰ってくる声の大きさや顔の表情から一人一人の受講生の授業開始時の体調や授業への意欲等を感じ取れるようにしている（医師の問診に等しい）。返事の小さい学生には意図的にもう1回名前を呼ぶようなことも行われる。当然のこととして、暑い夏場での出欠の点呼は日陰のある木陰に受講生を座らせ、授業者は日向に立つということも原則としている。当然授業中に集合を掛け、説明をする時なども受講生は太陽光線を背中に授業者が太陽に向かう位置に立つ事の重要性も受講生に理解させたいことのひとつである。

準備運動も形式的なラジオ体操的なものは一切行わない。その日の教材を想定して、手つなぎ鬼やシャドーボクシング、脚ジャンケンなど必ずペアーや複数の人数で行う楽しいゲーム感覚の運動を用意する。また、受講生全員の間人関係を図らせる意味から、ペアーを組む時はできるだけ普段話したことのない他専修の見知らぬ学生同士で、男女のペアーを原則とする。そして、お互いの自己紹介をさせ、親密な関係を築かせる。このことによって、キャンパスで挨拶をする仲間が増えたという声を受講生から聞くことになる。

(3) 陸上競技の「走・跳・投能力の意味するもの」～生きがが為（生活生存）の手段であった

「5000年前、我が家に飢えた8人の子どもがいたら、親としてあなたはどうか」という想定のもと、竹やりを一本与えて、狩りに出かせさせる（グラウンドを走り回る）。狙いは飢えた腹ペこの子どもに美味しいイノシシの肉を食べさせてやることである。まず、イノシシがいそうな場所まで走って移動。見つけたら槍をイノシシに投げつける。射止めたらイノシシを背中に背負って帰路につく。途中、川や断崖絶壁の場所に遭遇したら泳いだり、飛び降りたりしなければならない。5000年前、もしあなたにこのような身体能力がなかったらあなた及びあなたの子どもは確実に「死」に追い込まれたのではないだろうか。つまり、陸上競技の「走・跳・投の能力」とは生命維持のための大切な手段であったはずである。さて、現実にイノシシを仕留めて、帰って来る受講生はゼロである。つまり、竹やりを投げて穂先からきれいに突き刺せる技術を持った受講生はゼロである。振り返って、現代における「陸上競技」の意味するところは何であろうか（ノート学習）。

(4) 短距離走における「足が速い遅いの意味」～速く走る為の指導原理の発見

短距離走で「足が速い・遅い」に関する授業は7～8名のグループ単位で行う。1)「30m」の距離を設定し、2)運動体として①自然歩行、②最大疾走(100%全力走)、③最大疾走の80%、④最大疾走の50%、⑤腕振りなしの最大疾走で、3)そのときの①タイム、②歩数、③ストライドを測定し、④ピッチを算出(ストライドの測定は爪先から爪先までの水平距離とし、ピッチは所要時間と歩数から1秒あたりの歩数(歩/秒)として算出する)。4)これらの数値を①「歩・走スピード」-「平均ピッチ」、②「歩・走スピード」-「平均ストライド」、③「平均ピッチ」-「平均ストライド」のグラフとして作成し、両者の関係から各自、検討を加える。

結論的にはピッチは腕振りの速さに、ストライドは腕振りの大きさに関係するもので、足が速いことの原理は「1)ピッチが速いか、2)ストライドが大きいか」に帰結する単純なものである。そして、足が遅い児童には「1)腕を速く振りなさい(ピッチ)、2)腕を大きく振りなさい(ストライド)」が運動学的な指導となる。体育的・教育的には「勝敗に対する正しい態度の育成」や「タイムや順番に関係なく一生懸命に走った敢闘精神」を褒め称えてやる事などが指導の対象となる。

(5) 走り高跳びの指導～果たしてベリーロールや背面跳びは危険な跳躍法か(段階的指導を通しての体験から結論を出そう)

走り高跳びの指導では小学校体育では危険と考えられ「指導しないこと」とされている「ベリーロール」と「背面跳び」を体験させ、受講生自らが「危険な跳躍法か否か」を確認することと、段階的な指導法を用いると必ずしも危険な跳躍法でもないし、難しい跳躍法でもないことを体験させる。その方法論は「ベリーロール」の誕生の背景には1日中働きつめのカウボーイが夕暮れ時、牛を柵の中に追い込み、気もそぞろに大きな丸太の柵を跨ぎ越した動作に由来していること等を教授する。また、「背面跳び」はフォスベリーなるアメリカの大学生が、全米大学陸上競技選手権大会に出場したいとの強い気持ちから走り高跳びの原点、つまり、「ハサミ跳び」を行っているときに勢い余って背中から着地した偶然から誕生した話から指導が始まる。そして、ベリーロールの指導では、「1)2人1組になって、背中を丸めたパートナーの背中を牧場の柵宜しく跨ぎ越す、2)安全マットの前で1)の動作を行う、3)バーを置いて行う」の3段階である。背面跳びでは、「1)「ハサミ跳び(ゴム跳び)」の要領で跳ぶ、2)ハサミ跳びの要領で跳び、着地時に思い切り両足を振り上げ、マットの上にバーと平行に身体全体で落下する、3)踏み切りの腕の振り上げ時に上体を90度を捻り、背中がバーに平行になるようにして跳び出し、落下時には身体がバーと直角になるようにする」という3段階の練習を行わせる。このように段階を踏んだ指導を行えば、基本的にはほぼ全受講生が僅か数回の試技で跳べるようになる。

この際のキーワードは「落下の気持ちよさ」の体感と「全員」が跳べたということである。最もそのバーの高さはロイター板を用いて女子110cm、男子は145cm程度である。

(6) 走り幅跳びの指導～宇宙遊泳の気分を味わう

走り幅跳びの指導は学習指導要領では「走り幅跳びの技能を養い、記録を高めることができる」とされているが、本授業での走り幅跳びの指導は1)正しい記録の測り方、2)助走や砂場の安全確保のための整地の大切さ、3)踏切足の概念、4)助走距離と跳躍距離の関係、5)M.パウエル選手やC.ルイス選手を体験するという課題のもと彼等と同じ助走距離「45m」からの助走での試技を体験する。これらに加えて、6)弾性バネの利いた「ロイター板」を利用した跳躍の指導で、そのねらいは各人

が踏み切りから着地局面に掛けての空中局面を「体が浮いている」「ああ気持ちいい」という宇宙遊泳の気分を体感することで、跳躍記録の良し悪し等は基本的には関係ない。

(7) ハードル走～恐怖を除去する船底型ハードルの使用

ハードル走に関しての受講生の態度やフォームなどは極めて否定的である。「跳びたくない」「怖い」「嫌だ」といった実態である。そこで、筆者の創意工夫によって特別に作成された「船底型ハードル」の登場である。簡単に言えば、バーの部分が触れたら簡単に外れるように塩化ビニール製の横バーで、本体は船底型になって、衝撃が加われば揺りかごみたいに前後に揺れることから、ハードルをしている人がバランスを壊して転がるようなことがほとんどないハードルの開発試作である。従って、「バランスを崩して転んでしまうのでは」と言った心配がほとんどないハードルを用いた指導である。

(8) リレーの指導～誰が抜いて誰が抜かれたかが不明のリレーの工夫

リレーは「チーム一丸となって協力し合うところに喜びがある」と学習指導要領ではしているが、小学校時代のリレーで1)「君が抜かれたから自分達のチームは負けた」→2)「それ以降私はリレーが大嫌いになった」→3)「体育の授業も嫌になった」とする受講生が意外に多い。それ故、本授業では誰が抜いて、誰が抜かれたと言ったリレーではない方法でのリレーを指導している。メンバーの組み方はゲームスタイルで例えば8人1組のチームを作る。この8人が同じチームとなって、1)お互いに両手を取り両手を最大限に伸ばして円を作る→2)更にこの位置から5歩後方に下がり、3)円を広げて座る。これがトラックになる。この状態で、第1走者を決め、「用意スタート」で走り出し、円を1周して次の走者の肩をタッチ（これがバトンパス）する→次々に走り、最後のランナーが自分の位置まで走破して座った時点がゴールとなる。これで順位を競う。このやり方でいけば順位はつくが誰が抜いて、誰が抜かれてといった状況は誰にもわからず、前述した「おまえのおかげで我がチームは負けたんだ!」といった類の傷つけ方は全く生じないし、チーム全体での敢闘ぶりを喜び合える。

(9) 体育は総合学習型教科である～『「これが体育だ」「これも体育だ」』

前期の授業では風薫る5月に、後期では紅葉のきれいな11月に、『「これが体育だ」「これも体育だ」』なる単元名で行われる授業である。そしてこの授業の目的・目標は「昼ご飯を美味しく食べよう!」である。授業は大学のグラウンドを離れ、大学の裏の山林までジョギングで出かける。ジョギングの意味と意義を語り、走ることが嫌いとする受講生を授業者の横に付けて先頭ランナーとし、彼等の走スピードで走り出す。途中で誰かが苦しいと表明したらジョギングを止めてウォーキングに切り替える。要所要所では休憩を入れ、休憩時には各種の柔軟運動やストレッチングを行う。途中の田圃の畦道道を田圃に落ちないように歩き、用水路の3m幅の川にさしかかったところでは筆者による「棒幅跳び」のデモンストレーションが行われる。人工湖の頂上まで続く石垣（筆者はこれを甲府の万里の長城と名付けている）を手を使わないで、バランスを崩さないように切り切る。切り切った人造湖の土手で股の間から街の風景を見て、その光景をノートに描写させる。前期では若葉青葉を、後期では、紅葉の落ち葉を2枚拾い、ノート学習でその植物の名称、属、分布状況、各人のその植物に対する感想などを記述させる。ノート学習では大学から走り出したコースを描き、要所要所で各人が感じたことや気分の変化等を書き込み、股の間からの景色を描き、そして葉っぱの名前などを記す。

観点を換えればこのような授業は小学校では社会（地理）であり、理科であり、図画工作である。しかし、この授業の目標はジョギングを通して「汗を一杯かき、昼ご飯をおいしく食べよう」という目標での体育の授業である一方で、「総合的学習」でもある。まさに、「これが体育だ」「これも体育だ」を実感できる授業である。

(10) 各人の疾走フォーム、走り幅跳びの跳躍フォームの作成～バイオメカニクスの導入

短距離疾走、走り幅跳び、走り高跳び、ハードル走に関しては各人のベストパフォーマンスの試みの時の動作フォームをビデオ撮影し、そのフォームを筆者の保持するコピープロセッサを用いて連続写真として完成させ、各人のノート学習の対象にさせる。当然、若干のバイオメカニクスの視点を与え、疾走フォームではストライドやピッチ、走り幅跳びでは跳躍角度の分析なども算出させる。バイオメカニクスの概念や有効性を実感させられる指導である。

(11) 視覚や感覚に訴える授業～世界記録のすごさに夢を語る

授業においては陸上競技の世界記録を視覚に訴えさせ、その記録の凄さを実感させる試みもある。砲丸やハンマーを実際に投げさせてその重さ「16ポンド:7.26kg」や世界記録23m12（男子砲丸投げ）、86m67（男子ハンマー投げ）に受講生はびっくりする。走り高跳びの（2m46）や棒高跳び（6m14）等の高さに受講生の目は輝き、その記録のすごさに驚き、夢を感じるようである。体育とは「夢を語る」ことであり、体育の指導者とは「夢売り人」であることが実感される。

VI 受講生の初等体育科教育及び陸上運動に関する実態

1 陸上運動に関する実技能力の向上

図1に1993年から2005年までの女子の受講生の走り幅跳びの記録の変遷を示した。

1993年の平均値は「3.18m」であったが、記録は年々直線的な低下傾向にあり、2005年では「2.68m」であった。その回帰方程式 ($Y = -0.0465t + 95.901$) から「 $Y = 0$ 」の算出が可能であり、 $t = 2062$ 年には「 $Y = 0$ 」つまり、初等体育科教育受講生女子の記録は「0m」と信じられない低下傾向を示しているのである。

2005年度の「2.68m」なる記録は小学校6年次男女の記録「3.54m」「3.09m」と比べても遙かに見劣りする記録である。その他の短距離走タイム、走り高跳び、ハードル走のパフォーマンスや記録も信じられないくらい低い。陸上競技の専門家を自負する立場の人間として言えば、小学校の体育の授業で「陸上運動」の授業を指導するにはあまりにも惨憺たる実態であることを嘆かざるを得ない。

2 学習指導要領の目標の理解とその目標に沿った日常生活の実践

毎回最初のオリエンテーションの時に、学習指導要領における小学校体育の目標を板書し、それに沿った各人の実態を「10点満点」で評価させ、授業の最終段階で再度その得点化をノート学習の一環としてを行わせる。その差に本初等体育科教育、陸上運動の指導効果が見いだされることとなる。平成14年から平成16年度の前々期までの6回分の結果が表2に示されている。何れの年度においても授業前後の得点は有意 ($P < 0.001$) に向上している。

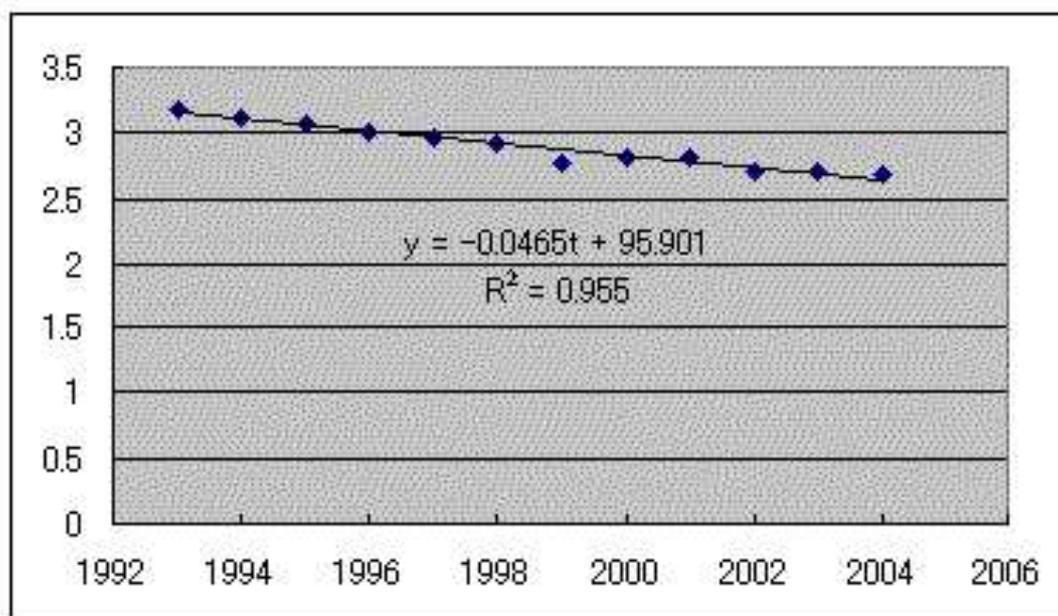


図 1: 女子受講生の年度ごとの走り幅跳びの記録とその回帰方程式（その低下ぶりは驚きである）。

学習指導要領における 小学校体育の目標の項目	平成 14 年度		平成 15 年度		平成 16 年度							
	前期	後期	前期	後期	前期	後期						
心と体を一体として捉える	7.1	8.2	6.9	8.0	6.9	7.2	6.6	7.1	6.8	7.2	6.5	7.0
適切な運動の経験	4.9	5.8	5.0	5.8	5.8	7.0	4.9	6.8	4.2	6.0	4.1	6.7
健康安全についての理解を図る	6.0	6.8	5.9	6.9	5.9	6.6	5.2	6.6	5.5	6.4	5.9	7.0
運動に親しむ資質や能力を育てる	4.2	6.0	4.8	6.4	5.0	6.5	4.9	6.9	4.9	6.2	4.1	6.5
健康の保持増進を図る	5.7	6.8	6.0	7.1	5.9	7.0	5.5	6.8	5.5	6.6	5.2	6.6
体力の向上を図る	4.0	6.7	4.7	6.8	4.4	7.0	4.9	7.1	4.1	5.9	4.2	5.6
楽しく明るい生活を営んでいる	7.1	8.0	6.9	7.9	7.1	7.9	6.8	7.3	7.0	8.3	6.6	8.6

表 2: 授業前後の「体育の目標」に関する実態（10 点満点の全受講生の平均値）

3 受講前後の「体育の授業に対する態度」及びその変化

小林によって作成され植屋によって修正された「体育の授業に対する態度」のアンケート結果を図 2 に示した。僅か 7 回程度の授業であるが受講生の体育に対する態度は 1) 喜び尺度、2) 評価尺度、3) 価値尺度のいずれにおいても統計的に有意 ($P < 0.001$) に改善されているのである。

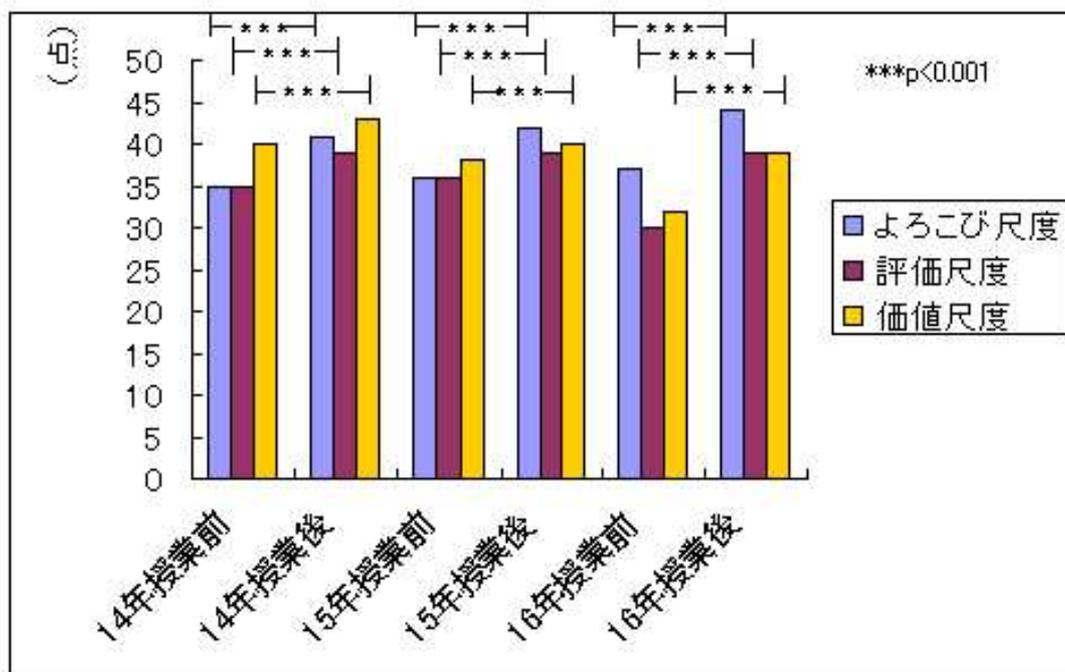


図 2: 授業前後の体育の授業に対する態度得点の変化 (何れの年度の何れの項目でも有意な変化 (P < 0.001) が見られる)

4 ノート学習に見る小学校体育（陸上運動）への意識改革

受講生にはノート学習が指導の対象として課せられる。その目的は毎回毎回の授業を「学習指導案」が作成できるようにとの願いのもとに行われるものである。基本的には学習指導案の作成のノウハウを指導し、授業の内容、その展開（導入－展開－まとめ）、そして指導者として留意しなければならないポイント等の気付かせ方である。毎回毎回の授業の展開は必ず授業者（筆者）によって点検され、指導される。従って、本授業において学習指導案の作成は一応可能となるように指導される。併せて、小学生の事件・事故、陸上競技に関するトピックスや記録更新の新聞記事等は貼付資料として用いるように指導される。尚、考察・検討の為の参考資料として、筆者の「陸上運動のここを変える（楽しい体育の授業（1998.4～1999.3の連載）、明治図書）」等のプリントを推奨している。

VII 論議

1 小学校体育における指導力不足教師とその存在

小学校で「 $1/2 + 2/3$ 」を知らずして算数の授業をする教師がいるであろうか。「山脈」という漢字を書けなくて、国語の授業をする教師がいるであろうか。もし、このような教師がいたら、まさに指導力不足教師ということで問題視されるであろう。しかし、小学校体育に関しては、例えば、水泳の授業で泳力がなく自らはプールに入らず、平服のまま指導する教師は相当数いる。文部科学省の発表による指導力不足教師の数は全国で566人程度と報告されているが、小学校体育における指導の実態はこのような数ではない。

本授業でも走り幅跳びの記録どころか、走り幅跳びの動作にすらならない受講生が相当数いる。走

り幅跳びや走り高跳びの世界記録や日本記録の実態を知る学生は皆無に等しく、ハードルの高さが何cmとか、最悪の例として、走り幅跳びの計測の仕方すら知らない学生が相当数いる。彼等の話によれば、小学校・中学校・高等学校を通して正式に、走り幅跳びやハードル走の指導を受けたことが全くないという受講生が相当数いる。

結果として、受講生の陸上競技における知識、経験、実技能力、師範能力等は極めて低い。ましてや、小学生の前で、走り方やハードリング動作を師範してやる等極めて厳しい。

しかし、このような学生が最終的に教員採用試験を突破して小学校の教師になったとしたらまさしく「指導力不足教師」と呼ばれても仕方のないところである。

受講生のこのような由々しき問題はどこに起因しているのであろうか。彼らの本授業の受講生までの生育や成長の仕方を問題視しないわけにはいかない。基本的に彼らの多くは運動やスポーツ等で身体を動かすことをそれ程好きとはしない学生である。中学校・高等学校時代の体育が選択制教科であり、自分の好きな種目（領域・内容）が選べる。つまり、陸上競技種目を選択しなければ、短距離走も走り高跳びもハードル走も体験せず、高等学校を卒業するのである。我が国においては偏差値教育の影響下の大学受験で、受験生の勉強の仕方は主要教科（英・数・国・理・社）の所謂、受験対象科目の勉強（点数アップ）がメインであり、受験に関係しない体育等はものの価値ではないといった捉え方となっている。従って、過酷な受験勉強を強いられる受験生の体力や運動能力は極めて低い。その上で、大学生になってから意識的に、その体力や運動能力を挽回しようという考え方も価値観も生まれることなく大学生活を送る。中には、運動系のサークルに所属し、結果として身体を動かす生活を持っている学生もいるが、大方の学生は健康とか体力とか運動能力とか、考えて行動をすること等あり得ない。ましてや、もし自分が小学校の教師になったら鉄棒も水泳もボール運動も陸上運動も指導しなければならない。それ故、今のうちから走り高跳びを、ハードル走を練習しておこう等の考え方や行動も生じない。このような傾向は女子学生に多く見られる。

更に、指導力不足教師に関しての厳しい状況は、都道府県で行われている小学校教員採用試験で、必ずしも小学校体育の指導に資する内容を試験の内容として設けていないという事実である。この都道府県においても実技試験が天候に左右されない、短時間で終わる、評価が難しくないといった内容で行われている。

例えば、小学校体育の陸上運動の指導力を見るのであれば、ハードルを5台置いてハードリング動作をさせれば、小学校体育に必要なハードル走の実技能力を有しているかどうかはほぼ100%分かる。しかし、このような試験を課していない為に、受験生の実技能力が正当に評価されない状態で、小学校教師として採用されているのである。教員採用試験の体育に関する実技試験で正当な評価の関門があれば、受験生は教員採用試験に向けて勉強や取り組みの中で、それこそ体育実技の練習に取り組むことは間違いないはずである。

ところで、本研究のタイトルにある「指導力不足教師」を防ぎ得る授業が、本初等体育科教育の授業で行われているかという回答は残念ながら「ノー」である。現実的に僅か7回程度の授業数では基本的には無理である。但し、小学校における体育の重要性、陸上運動の大切さ等の理解、指導力に関わる知識の拡大、授業の運営に必要な準備運動や用器具の安全点検（例えば砂場の整地やスコップの適正な置き方）、学習指導案の書き方、明るい表情での授業への参加等も指導力に関わることであり、その方向の向上は明らかに見られる。但し、残念ながら、女子の受講生の大半は短距離走、走り幅跳び、走り高跳び、ハードル走のどの教材をとっても「小学校5・6年次の男児」を上回るレベルには達しない。本学で行われている半期完結性の授業では、受講生の実技能力を高めるにはあまりにも期間や回数が短すぎる。従って、現実に教師になるまでの間に自分自身の実技能力を高める必要性をひしひしと感じ、努力してくれることを願うしかないのである。

彼等の小学校教師への価値観、その中に体育の授業の担い手になるという強い思いに訴えられれば、その後の3年生次、4年生次での過ごし方次第では、幾らでもその実技能力の向上は図れると思われるが、本授業終了後の彼等の行動にそれらしいものがそれ程見られないのは残念なことである。

VIII まとめ

本授業を通して、小学校の教師になり、体育の授業も担当する上での「指導力の向上」ということを前提にまとめれば、小学校体育の目標の理解や学習指導案の作成等にはそれなりの向上が見られる。しかしながら、陸上運動（競技）に関する知識や経験の積み重ね、その延長上で実技能力を高め、最終的に児童の前でやってみせるという「師範能力」の育成はほとんど無理である。彼等の実技能力や師範能力を高める為には現行の教員免許法や半期完結性といった決定事項を変え、小学校教諭普通免許の資格取得の条件として全員が「初等体育科教育」や「体育理論及び演習」「基礎水泳」を必修教科として受講し、単位を取得するといった改正が必要と思われる。

加えて、本研究のテーマからは逸脱するが、都道府県における小学校教師の採用試験に本質的な体育実技を課すこと等も指導力不足教師を一掃する観点からは急務中の急務と考えられる。その意味で大学教育の入り口（高校・大学受験）から出口（教員採用試験）までを総合的に考え、その対策を講じない限り、小学校教師予備軍の小学校体育の目標に沿った指導力の向上は安易なことではない。

それが図られないのであれば、諸外国で行われている小学校体育における「教科担任制」の導入も視野に入れるべきであろう。学級崩壊やクラスでのいじめ等の背景に、一人の担任による「クラス担任制」の指導の限界が指摘されていることも含めて、「教科担任制」への移行も真剣に考えるべき時期に来ていることを暗示させられる授業でもある。

参考文献

- [1] 朝日新聞, 2005年8月10日朝刊
- [2] 日経新聞, 2003年9月25日朝刊, 2005年10月11日
- [3] 文部科学省学習指導要領(2004), 小学校学習指導要領解説書(体育編), Pp.136
- [4] 植屋清見(1994) 本学教育学部初等体育科教育における陸上運動の指導, 山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要2, pp.56-64
- [5] 植屋清見(1998~1999) 陸上運動のここを変える、楽しい体育の授業, 明治図書(第1回:1998.4~最終回:1999.3), 各号何れも pp.69-71
- [6] 植屋清見(1999) 小学校・中学校体育にバイオメカニクスをどう活かすか、バイオメカニクス研究概論, 第14回日本バイオメカニクス学会大会論文集, pp.44-49
- [7] 植屋清見(2000)、バイオメカニクス研究の成果と体育科教育～バイオメカニクス研究の学校体育の指導への導入・貢献, pp.291-298, 21世紀と体育・スポーツ科学の発展 — 日本体育学会第50回記念大会誌 —

- [8] 植屋清見（2000）小学校教員の体育及び体育の授業に関する実態～平成11年度山梨県教育職員免許法認定講習会から～，教育実践学研究，山梨大学教育人間科学部附属教育実践研究指導センター，研究紀要，No.5，pp.13-25